

明日香村

～ 風土と人の心が築き上げた古代文化の香り豊かな郷 ～

「初めて来たのに、何だか懐かしい」。明日香村を訪れた人はそんな感想を口にします。山裾に広がる棚田、のどかな花畑、川を舞うホタルなど「万葉集」にも詠まれた豊かな自然があり、昔から変わらない里山の暮らしと風景が村内に色濃く残っています。

多くの歴史的遺産を未来に伝えるため、「飛鳥・藤原の宮都とその関連資産群」のユネスコ世界文化遺産への登録を目指し、あわせて「明日香まるごと博物館」など様々な施策に取り組んでいます。

I 概要

1. 地理

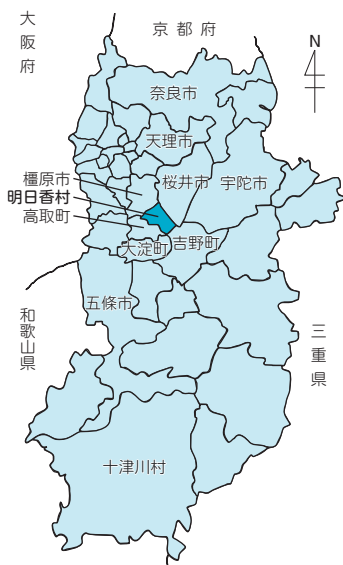
明日香村は県中部、奈良盆地の南東部に位置し、北西は橿原市、北東は桜井市、南西は高取町、南東は吉野町と接する人口 4,874 人、世帯数 1,787 世帯〔2023 年 11 月 1 日付 市町村別推計人口・世帯数（奈良県）〕、面積 24.10km²の村である。

大阪市から約 40km、奈良市から約 25kmの圏内にあり、奈良盆地の南端の平地と竜門山地の一部からなっている。

村の中央部に飛鳥川、西部に高取川という大和川水系の 2 河川が流れ、飛鳥川上流には、日本の棚田百選のほか文化庁の重要文化的景観に選定されている「いなぶちのたなだ稲渚棚田」が広がっている。

アクセス面では、大手私鉄で唯一「村」にある

明日香村の位置図



近鉄吉野線・飛鳥駅が、大都市圏への通勤・通学及び観光に利用されている。

車では南阪奈道路や西名阪自動車道を利用して大阪市内まで約 60 分で結ばれる距離にある。



重要文化的景観に選定されている「稲渚棚田」

2. 歴史

同村は飛鳥時代と呼ばれる 6 世紀末から 7 世紀にかけての約 100 年の間「都」が置かれ、天皇という称号や日本という国号が初めて用いられるなど、日本の古代国家が形成された「日本のはじまりの地」とされる地域である。

現在の明日香村は、1956 年 7 月、高市郡さかあい阪合村、高市村、飛鳥村の 3 村が合併し、新しい村名は「明日香」に決定された。「飛鳥」と「明日香」という 2 つの表記は、どちらも飛鳥時代から使われているが、主に古事記や日本書紀では「飛鳥」、万葉集では主に「明日香」と記されている。現在では、都があった周辺地域や時代を指すときは「飛鳥」、自治体名を指すときは「明日香」と使い分けされている。

3. 産業構造

従業地による就業者人口（15 歳以上）の産業別割合を見ると、第 1 次産業が 10.3%、第 2 次産業が 20.8%、第 3 次産業が 68.9%となっており、奈良県全体（順に 2.4%、22.1%、75.5%）

と比べて第1次産業のウェイトが高い（総務省「国勢調査 従業地・通学地による人口・就業状態等集計」（2020年））。民営事業所数は、248か所（県内26位）で従業者数は1,380人（同27位）となっている。（総務省・経済産業省「経済センサス活動調査（2021年）」）。

4. 人口構造

村の国調人口は1990年の7,363人をピークに減少が続き、2017年4月に過疎地域に指定された。

年齢階級別人口移動を見ると、子育て世代や若年層（15歳以上35歳未満）の転出に伴う人口減少が顕著である（総務省「国勢調査移動人口の男女・年齢等集計」（2020年））。村の高齢化率は42.7%と奈良県平均の32.4%を上回っている。（奈良県「年齢別推計人口」（2022年10月））



2023年5月に開庁した明日香村新庁舎

II 「飛鳥・藤原」世界文化遺産登録に向けて

1. 「明日香法」によって守られた歴史的風土

明日香村は、我が国の律令国家体制が初めて形成された時代における政治・文化の中心的地域であり、宮跡・寺院・古墳など文化遺産が数多く存在し、万葉集にも詠われた歴史的風土と一体となっている。

1960年代の高度経済成長に伴う開発行為から美しい景観を守るため、国内では1966年「古都保存法」が制定された。同村でも村の主要地域で建築や造成などに一定の制限が課せられるなど、住民が一体となって自然環境の維持・保全に取り組んできた。

しかしながら、宅地開発など都市化の波が押し寄せたことに加え、規制による保存区域の現状維持を図るだけでは住民の生活環境や産業基盤の脆

弱さが解消されないことから、自然環境を守ることが困難な状況となっていた。

そのような状況の中、地元住民や飛鳥に魅せられた多くの有識者が、歴史的風土の保全・維持の声をあげ、国などの関係機関に働きかけたことで、保存の担い手である住民生活との調和を目指す新たな特別立法制定への機運が高まり、古都保存法の特例として、日本で唯一、一つの村の全域が法の対象となる「明日香法」が1980年に制定された。

明日香法は、自然環境を将来にわたって良好に保存していくには、住民生活の安定や産業の振興との調和が不可欠との考え方を基本に、様々な開発行為が規制される一方で、歴史的風土を保全・維持するための助成制度が設けられるなど、かけがえのない美しい景観を未来に保存・継承していくうえで大きな役割を果たしている。

2. 貴重な歴史的遺産を将来に伝える取組み

明日香村には極彩色で有名な「高松塚古墳」の壁画や石室に四神や十二支の美しい絵が描かれている「キトラ古墳」の壁画など国宝3件、「石舞台古墳」や全国でも5基しかない八角墳である「牽牛子塚古墳」など国指定特別史跡・国指定史跡が20件存在する。その他、国指定重要文化財が20件、国選定重要文化的景観1件などがあり、村全



（上）飛鳥時代の天皇陵の象徴とされる「牽牛子塚古墳」（左下）高松塚古墳の壁画（国宝）、（右下）キトラ古墳の壁画（国宝）



体が貴重な歴史的遺産の宝庫と言える。

これらの貴重な歴史的遺産を保護し、将来に伝えていくために目指しているのが、ユネスコの「世界文化遺産」への登録である。

2011年9月の就任以来4期目に入った村長の森川裕一氏は、奈良県や橿原市、桜井市などと協力し、「飛鳥・藤原の宮都とその関連資産群」を県内で4件目の世界文化遺産として、2026年の登録を目指して様々な活動を展開している。その登録活動と一体的に進められている施策が、「明日香まるごと博物館づくり」と呼ばれる観光振興施策である。

【明日香まるごと博物館づくり】

(※一部抜粋)

●観（みどころ）

- ・牽牛子塚古墳の整備（2022.3）
- ・高松塚古墳壁画保存公開施設（2029年迄に開館予定）
- ・歴史的な街並み、棚田の田園風景の活用

●感（体験）

- ・飛鳥ハーフマラソン（2022.3、2023.3に開催、2024.3開催予定）
- ・仮面劇 伎楽（ぎがく）プロジェクト（古代の東西アジアとの交流により伝わった仏教劇を再現）
- ・古代衣装体験、観光ナイトツアー等の実施

●泊（宿）

- ・ブランシエラ ヴィラ 明日香（古民家改装宿泊施設 2022.3）
- ・祝戸荘（星野リゾートが旧施設を改修し、2024年運営開始予定）
- ・星野リゾートの宿泊施設開業予定

●食（食事処）

- ・飛鳥鍋（鶏肉を牛乳で煮た伝承鍋料理）
- ・蘇（そ）〔幻の古代食とされる発酵食品〕

●買（お土産）

- ・道の駅「飛鳥」開業（2018.9）
- ・明日香の夢市（明日香村の特産物の販売所）

●その他

- ・明日香村役場新庁舎開庁（2023.5）
- ・「飛鳥・藤原まるごと博物館」検定の実施（2024年2月に第1回の実施を予定）
- ・飛鳥宮跡、飛鳥京跡苑池（2030年イベント実施予定）

3. 観光振興による地域活性化への取り組み

世界文化遺産への登録は、情報発信力や地域ブランド力の強化につながり、さらには、観光業をはじめとする地元産業全体の活性化も期待できる。

同村では、誘客から生じる観光需要を取り込むため、体験型観光施設の整備、長期滞在型宿泊施設の充実、新たな特産品の開発、インバウンド対策など、登録後を見据えた様々な対応に取り組んでおり、今後の観光客の増加が期待されている。



(左) ブランシエラヴィラ明日香（宿泊施設）
(右) 「飛鳥・藤原まるごと博物館」検定（案内パンフレット）

Ⅲ 暮らしの安心に向けたむらづくりについて

1. あすかっこ子育て戦略（仮称）

同村は2017年4月に過疎地域に指定されるなど、若年層の村外流出や少子高齢化が進行している。若年層人口の確保を図るため、村全体で子育てを支援するボランティア組織の活用、アプリによる情報提供ツールの整備等、こどもが暮らしやすく、住み続けたいと感じられるよう、学校・家庭・地域が一体となり、出産・子育て支援や教育支援の充実に向け、様々な取り組みを進めている。

【あすかっこ子育て戦略（仮称）】

(※一部抜粋)

●出産・子育て支援

- ・出産・不妊治療支援
- ・利用しやすい学童保育
- ・子ども食堂の導入
- ・空き家バンクの推進
- ・宅地供給促進と子育て世代新築支援の継続

●教育支援

- ・小中学校の1学年2クラスの堅持
- ・延長保育・預かり保育等の充実
- ・給食費無償化の取り組み
- ・親の新たな学び支援制度の導入

2. 終末期を支援する拠点づくり

少子高齢化や核家族化の進展に伴い、同村でも高齢者の孤独死や徘徊による行方不明者の発生などの事例がみられるようになった。高齢者が、介護が必要となった状況になっても、住み慣れた地域で自立した日常を営めるよう、生活支援が包括的に確保される仕組みを構築することが必要となる。

森川村長は、医療だけでなく、幅広く暮らしをサポートできるシステム、具体的には、在宅医療・在宅看護・在宅介護・リハビリ体制等が一体となった「トータルケアステーション」としての機能を有する施設の整備が必要と考えている。

高齢者が終末期まで、安心して住み続けられるための施設として、自宅・病院・介護施設など最後の暮らしの場の選択肢を家族と一緒に考え、支える仕組みを備える拠点づくりを進めている。

IV 次世代への産業基盤づくり

1. 空き家を活用した移住・定住の促進

同村は、明日香法による土地利用の規制により住宅地が少ないことが、人口減少の一因となっている。一方で、橿原市や桜井市に隣接し交通の利便性が良好であることから、同村への移住ニーズは高く、その対応策としてリフォーム工事の助成金や古民家の再生・整備に必要な補助金制度など、空き家を活用した移住者の受入と定住促進に積極的に取り組んでいる。

移住・定住の促進を図るため、生活環境の整備や子育て支援のほか、雇用の場の確保も重要であることから、観光を基軸とした農商業の活性化などによる雇用機会の創出を図っている。

2. 農業の6次産業化への取り組み

同村の農業は生産機能を担っているだけでなく、歴史的風土の保存において、重要な役割を果たしているが、農業従事者の高齢化や後継者不足に伴う耕地面積の減少など深刻な問題を抱えている。そこで同村が進めているのが、6次産業化（1・2・3次産業の事業の一体化）による収益性の高い農

【明日香村農業の6次産業化の事例】

- 1次産業（農業）
 - ・あすカルビー（ブランドいちご）や飛鳥古代米のブランド化
 - ・新たな農業従事者育成のための「農業塾」開催
- 2次産業（製造業）
 - ・村の野菜を麺類やフリーズドライ商品に加工する加工所の設置
- 3次産業（サービス業）
 - ・村の特産品を直売所や道の駅などで販売
 - ・村の農産物を農家レストランや民宿・民泊で提供

業経営の促進である。

6次産業化を進めることで、農産物のブランド化や新たな付加価値が生まれ、従事者の所得向上や新たな担い手の確保などの効果が期待される。

観光や商工業と連携した農業ビジネスの創出を通じて経営の多角化を推進し、地域経済の底上げを図る取り組みを進めている。



（左）あすカルビー（ブランドいちご）、（右）古代米のおにぎり

明日香村を訪れる観光客数は、高松塚古墳壁画が発見された後、いわゆる飛鳥ブームとなった1980年代のピーク時には年間180万人を越えていた。現在は年間約80万人前後で推移しているものの、「飛鳥・藤原の宮都とその関連資産群」の世界文化遺産登録が実現することで、同村の観光客数の増加などの経済波及効果が見込まれている。

森川村長は、世界文化遺産に登録することが目的ではなく、それをあわせて「明日香まるごと博物館」など様々な施策に取り組むことで、文化の振興を起点とした地域活性化の好循環の創出につなげたいと考えている。村が抱えている様々な課題を解決し、登録をきっかけに大きな飛躍が期待される同村の今後の取り組みが注目される。

（井上主税、秋山利隆）